

# エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第142号(通巻第202号)  
2015年1月22日発行 発行人:清水武志朗 編集人:  
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山  
複合施設 301 (事務局員は常駐していません)  
e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp  
URL www.ecomeetingtama.jp

## 多摩川流域セミナー 多摩市／府中市で開催



第43回になる多摩川流域セミナーが第2回多摩川流域歴史セミナーも兼ねて、1月18日に行われた。主催は多摩川流域懇談会。

集合場所の聖蹟桜ヶ丘駅にぞくぞくと 午前9時、風もなく快晴に恵まれた聖蹟桜ヶ丘駅西口に各地のスタッフが集まり、その数は一般募集の参加者を含めて60名ほど。

宮林・東京農大教授は別として、スタッフの顔ぶれはほとんど行政からが多い。国交省京浜河川事務所、東京都建設局、川崎市建設緑政局、立川市都市整備部多摩、多摩市環境部など。むろん、多摩川対岸の府中市からも参加している。

まずは多摩川流域懇談会の会長も務める宮林教授のあいさつ、事務局からの注意事項の説明、本日の行程の説明、そして班分けを行ったのちに出発。

最初は多摩市側の要所の説明のために交通公園のバードウォッチング場に行き、西、浅井、相田の3名がここの場所の特徴、野鳥の種類、植物、魚類、そして多摩市水辺の楽校などの紹介・説明を行う。ここからフィールドスコープで見える都庁の建物、東京スカイツリーなどの眺望も案内。



交通公園の野鳥観察会場で

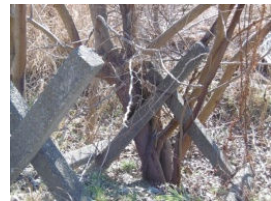
その後、関戸橋を經由して対岸に渡り、今度は多摩川左岸を府中市の郷土の森博物館に向けて歩く。途中で土手をおり、河川敷を進む。すると、本来の湧水地かどうかは不明だが、クレソンの茂った湿地があるのにおどろく。

また最近、不審火騒ぎがあり、野焼き状態の場所に多摩川左岸を歩いて観察



絶滅危惧種のレンリソウ(連理草)の群生地があったり、右岸とは違う環境を見ながら大丸の堰まで歩く。府中水辺の楽校から活

動状況、拠点としている付近の解説と河川整備についての説明があった。左岸の状況は右岸とはかなり異なっており、目新しく、ゆっくりと



観察したい場所だった。ここでもカワセミがホバリングしたり石垣の上で休んでいたり。

午後の部は、第2回多摩川流域歴史セミナーが郷土の森博物館会議室で行われ、江口桂・府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課長による「武蔵国府の成立と多摩川中流域の古代集落」という講演が行われた。その後、リニューアルしたばかりの博物館内を案内してもらって午後4時30分にこの日の日程を終了。

とはいえ、郷土の森博物館から、また多摩市に徒歩で戻ってきたため、全行程で1万3000歩。歩きくたびれました。  
(写真とレポート:西)

## 32種の野鳥を堪能した冬鳥観察会

1月17日、環境学習セミナーの番外編として多摩川、大栗川での冬鳥観察会が行われた。これは、セミナー第2回の10月5日に予定されていた「多摩市水辺の楽校の活動」が大雨のために流れてしまったものの代替フィールドワーク。



天気晴朗、野鳥もたくさん観察

スタッフは当会議の6人と市環境部から2人が午前9時に聖蹟桜ヶ丘駅の西口に集合。参加者は環境学習セミナーの参加者が7名と市の広報で呼びかけた一般の参加者が6名で、合計21人のグループとなった。

晴天のなか多摩川に出ると、北風があり寒さを感じながら、基礎的な「双眼鏡の使い方」などの説明を終えたのち、バードウォッチングに移った。

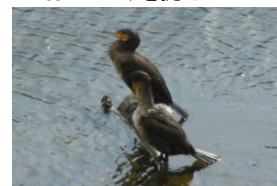
一ノ宮公園から四谷橋方面をチェックすると、野鳥はいるのだが何かは判断できず、フィールドスコープでのぞいてみるとカイツブリ、ヒドリガモ、オオバン、ムクドリなどだった。対岸にはコサギ、ダイサギ、カワウなども見ることができる。

さらに空にはトビも飛んでいて、しばし至福の時間を過ごすことができた。

交通公園方面への移動中、関戸橋の橋げたにはここに棲むチョウゲンボウを裸眼で確認。さらに交通公園までにコサギ、オオサギ、ノスリなどを観察。大栗川ではカワセミのホバリングを見ることができて、みんな幸せそうな顔つきでこの会への参加を喜んでいた。

けっきょく観察できた野鳥は32種類。内容はカイツブリ、カワウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、キジバト、カワセミ、タヒバリ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、トビ、ノスリ、チョウゲンボウ、カワラバト、ツグミ、シジュ

2羽のカワウを捉えた



ウカラ、ホオジロ、カシラダカ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、カルガモ、コガモ、ヒドリカモ、ハクセキレイ、ヒメアマツバメ、オオバン、イソシギ。(写真とレポート：西)

## 多摩市で想う「日の出」とごみの最終処分



村松 美花(多摩市住民)  
約18年前のこと。ごみはちゃんと分別してるし、収集日も守ってるし・・・その先のこと？ そんなもの知らない！ まったく関心がなかった。燃やしたあとの

「灰」の存在なんてことすら、考えたこともなかった。そんな私が学校給食の食器問題に関わり、「廃棄した時も問題が・・・」ということで初めて処理について考え、処分場を知り、ショックを受けました。その直後、現住所の多摩市に転居。公民館に立ち寄ったらトイレトーパー、再生紙などが展示されていて、その場にいた活動しているみなさんと出会ったこと・・・。

市の最終処分場見学があり、自治会の枠が空いていたので、すべりこんで日の出に行ったこと・・・そのことが、私にとってとても大きなことでした。



バスで向かった日の出町。どんどん緑が多くなり、その先に大きな処分場が！！ 言葉にできない、あらかせない衝撃を受けました。

ゾクとききました。当時、二ツ塚の処分場にあったトラスト地に、さそわれて2人の子どもと一緒に行きました。その場から見た処分場・・・胸が苦しくなりました。

「ごみをなんとか減らさなきゃ！！」そのことで頭がいっぱいになってきて「何かを・・・ひとつずつでも・・・やらなきゃ」と活動を始めました。そうだったはずなのに、私の中でもいろいろ葛藤があり、いまではちゃんと考えられているのが、「いま自分がやっていることって・・・何をやっているのだろう・・・」と、実際やっている活動も少なくなってきました。日の出の処分場にも、しばらく行っていません・・・。

そんな状況でいる私。2011.3.11以降、またいろんなことが、私の中でぐちゃぐちゃしてきました。私たちのところでも放射能のことで影響を受けました。放射能のことがなくても、考えなくてはいけないことなのに・・・あらためて気づかされました。

煙突が特に高いエコセメント工場



なにか大きなことはできないし、全体から見ることもしかない。・・・けれど、気になることはつぶやき、問いかけていきたいと思っています

ます。

いま、気になることは

●東京たま広域資源循環組合の情報公開条例がないこと。

●三多摩地域第5次廃棄物減容(量)化基本計画策定について。

この2つに私はひっかかっています。組合に問いかけていきたい。

あっ、もうひとつ衝撃を受けた時がありました。「エコセメント工場」です。作っている(建てている)時、そして完成した時・・・複雑な気持ちでした。

(地図と写真は東京たま広域資源循環組合のHPから)

## 「バードストライク」で絶滅危惧種死ぬ

北海道の釧路市で開かれていた「渡り鳥に関する国際会議」で、日本野鳥の会・自然保護室の浦達也さんが「風車と渡り鳥」に関する研究を発表した。



それによると、2001年から2014年3月までに、風力発電所の風車に渡り鳥などが衝突する「バードストライク」が原因で死んだ野鳥が、国内で確認されただけでも計約300羽にのぼり、このうち天然記念物のオジロワシなど絶滅危惧種は6種、計42羽だったという。

同会議で16日に報告した浦さんは「原発に代わる再生可能エネルギーとして、風力発電は推進すべきだが、建設する場所に留意する必要がある」と話している。

報告によると、衝突死した絶滅危惧種はオジロワシ37羽、ウミスズメ、ヒメウ、クマタカ、イヌワシ、オオワシがそれぞれ1羽。準絶滅危惧種は3種の計4羽で、それ以外はトビ約50羽、ウミネコ約10羽などの死が確認されている。

ただし、これらのデータは発電事業者の発表や報道などに基づいており、浦さんは「全体の一部にすぎないのではないか」とみている。

また、大規模風力発電施設がある北海道稚内市の宗谷岬で、レーダーを使って飛行ルートを追跡調査した結果、オジロワシやオオワシが発電所の周辺を避けるように飛んでいることが判明。渡りのルートが野鳥自身によって変更された可能性が高いという。

欧州のバードストライク対策などに詳しい国際環境NGO「バードライフ・インターナショナル」(本部・イギリス)のトリストラム・アリンソン研究員は「鳥の飛行ルートや繁殖地を明示した地図を作製し、発電事業者に適切な場所を助言していくことが必要だろう」と指摘している。(参考：日本経済新聞1月21日付)

